

「授業を完全に理解したい」 教員観を変えた生徒の言葉

私はこの4月に若狭高校に着任した新米の校長です。始業式の式辞で、自分自身の経験を基に「本気で授業を大切にする」というメッセージを全生徒と全教員に伝えました。

その経験とは、私が本校で国語科教員を務めていた頃、担任をしていた生徒が面談で話してくれたことです。今も当時も本校は部活動が盛んで、9割以上の生徒が部活動に励んでいます。その生徒は運動部に所属し電車通学をしていたため、毎日帰宅が遅く家庭学習をする時間がほとんど取れていませんでした。

「だから僕にとつて、毎日の1時間1時間の授業がすべてです。僕は50分の授業の間、先生の話される内容を言っても聞き漏らさないよう心掛けています。そして、その授業の学習内容を完全に理解し、わからないことが一つもないようにしています。もしわからないことがあれば、その場ですぐ先生に質問して理解しています。僕にとつては授業でわからないことが出てくるということが何より恐ろしいことなんです」

と、その生徒は言ったのです。そんな気持ちで授業を受けているとは当時の私は思ってもみなかったので、背



Message

一人ひとりの 先生の授業が 生徒、クラス、 学校をつくっていく

授業をつくるのは個々の先生ですが、
授業改善に向けて他者の視点を取り入れるには組織としての取組も必要です。
学校全体での授業づくりについて、
本年9月に開催された中央教育審議会の
「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ(第3回)」で
自校の取組について発表された、若狭高校の中森一郎校長にお話を伺いました。



福井県立若狭高校 校長 中森一郎

なかもり・いちろう●1985年、美方高校に国語科教員として初任。以後、若狭高校、若狭東高校を経て、2013年若狭高校定時制教頭、2016年福井県教育委員会、2019年より現職。若狭東高校時代、本文中の授業実践や、地域の高校と連携し、学校横断の小論文講座を開催したことにより、県教委より「授業名人」に任命された。現在は校長として「本気で授業を大切にする」というメッセージを学校内外に発信している。



筋が伸びる思いがしました。

それからの私は自分の授業を二から見直し、1時間でのような力をつけるのか、1分1秒も無駄にしてはいけないという思いで教材や組み立て、問いの投げかけなどを練り上げた授業をするよう心掛けるようになりました。

その生徒が投げかけてくれた「授業の完全理解」という言葉が私を変えてくれたように、本校の生徒や先生方も毎時間の授業を大事にしてほしいと願い、「先生方と一緒にいい授業をつくっていききたい」と宣言をしたのです。宣

言をしたからには、なるべく時間をとって、先生たちの授業を見学するようにしています。気づいたことがある場合は、「今日の授業は何を目的としていましたか？」と、その先生が自身で振り返りができるような問いかけをするようにしています。

教科を超えた授業研究会で 教員としての基本姿勢を学ぶ

授業改善について、本校では2014年から「若手授業力向上塾」（以下、通称「師範塾」）を実施しています。本校は毎年のように、新任教員が入ってくるため、教員の3分の1が20代です。彼らの授業力を付けるために、教頭と各分掌部長、そして若手であった勉強会が師範塾です。グループに分かれて、まず師範であるベテランが授業実践します。お手本を見せるというより授業を開示して、いわば率先して恥をかいてもらい、授業を見合うことへのハードルを下げてもらっています。そして、放課後に振り返りの時間を持ち意見交換したうえで、後日若手の授業を見学します。

若手はもちろん、ベテランにとっても若手の躰きのポイントがわかるなど、気づきの多い勉強会であるだけでなく、クラス経営など授業以外で若手が悩んでいることも共有でき、若手にとってベテランがメンターとして機能しています。一方で、中堅が抜けているという課題もありました。

そこで今年から、師範塾のほかに、実習助手も含めた全教職員を対象とした授業研究会も実施することとしました。全教員が16グループに分かれて、6月から1カ月間でお互いの授業を参観し合ったのです。グループには同じ教科が入らないよう配慮しました。すると、他教科の先生からは「生徒の視点で授業を見られた」とか「教科を超えた関連性に気づいた」などの意見が出たり、実習助手からは「保護者の視点で授業を見た」など、多様な視点で授業を評価し合うことができました。教科の枠を超えて大切にしなければいけない姿勢や、授業の雰囲気づくりを含め、教員として大事なものを学べる場ができたと感じています。

授業は、生徒と教員の間 信頼関係があつて成り立つ

もちろん、うまくいっている授業ばかりではありません。そうした授業を見たときは、個別指導ではなく職員会議で「例えば、生徒が寝ていても平気で授業をしていたり、相変わらずチョーク&トークに終始した授業があるのなるべく減らしてください」と全員に周知するようにしています。また、1学期の期末考査前には「暗記しただけで点数が取れるような問題ではなく、思考力・判断力・表現力を求められるような設問を入れてください」とお願いしました。

部長等からは「そういうことを校長が言うと絶対になってしまうので、教務部長などに任せたい」と苦言を呈されましたが、私の考えを周知し続けることも大事だと思っていま

「先生たちと一緒にいい授業をつくりたい」と 着任最初の始業式で宣言

また、福井県では毎年「学習状況調査」という、生徒が教員の授業の「わかる度」を評価するものがあります。生徒からの評価がパーセンテージで目

教員が「コミュニティ」になることで 持続可能な組織が構築される

瞭然になるので授業を見直す絶好のチャンスです。先生方には生徒からの評価をしっかりと受けとめて、授業改善に努めるようお願いしています。

ただ、この調査で私自身の見方を変えなければと思ったのが、生徒と私の評価が一致しない先生もいたということです。チョーク&トークの授業や穴埋め問題の授業をしても、生徒からの評価がかなり高いこともある。その背景には、生徒とその先生の間に関係性があることに気づきました。こうした評価を見ると、授業とは、教員が一方的につくるものではなく、やはり生徒との関係性のなかでつくられていくものだと思ひ知らされました。

「チーム」から「コミュニティ」へ 丁寧なコミュニケーションが鍵

どんな先生でも「生徒を成長させた」「いい授業をした」という想いもついています。わかりにくい授業をしようと思っている先生はいません。でも、努力してもうまくいかないこともある。それを組織のトップである私から一方的に言うだけでは軌轍が生じ

ることもあります。そのために現場のチームとしての師範塾や全員参加の授業研究会があるのです。トップのビジョンと現場チームの両輪がないと組織はうまく回りません。

今までに多くの学校を見てきました。管理職がいくら旗を振っても現場が動かない組織がある一方で、若手が勉強会のチームをつくってもなかなか広がっていく学校もあります。

私はリーダーとして、「学校の中で何が起きているか知ろう」ということを常に意識しています。今何が大事なのか、目の前の学校で起きている課題をしっかりと把握することです。そのうえで、本校の教育目標である「異質のものに対する理解と寛容の精神」に立ち戻って、そのために何をすべきか考えます。「何かを始めるときに、そもそもどういう目的でやろうとしているのか」という原点に帰ることが大事」と、教育委員会時代の上司から学んだことがきっかけとなっています。

また、本校の強みは、チームでの取組を、常に前年より改善して進化させていくところとされているところです。同



じことを続けるのではなく、軌道に乗ってきたら次のステップを目指します。現場発で自主的だったチームでの取組を学校組織としての仕組みに昇華させることなど、組織の変化に対する拒否感が少ないのは、本校の教員集団がベテランを中心に「コミュニティ」を形成できているからだと思えます。

本校も初めから「コミュニティ」になっていたわけではなく、地道に先生同士が目的を共有して丁寧なコミュニケーションを取ることで築き上げられてきたものだと思います。師範塾でもそうですが、担当の先生が「こういう企画をするので是非師範を務めていただけませんか」とお願いしに行くことで快く引き受けてもらえます。

また、本校は探究学習も評価をい



海洋科学科の生徒たちが開発した「鯖醤油味付け缶詰」。2018年11月、高校生が開発した食品としては初めてJAXAにより「宇宙日本食」として認証された。



授業が面白いと、生徒は 脳をフル回転させて夢中で取り組む

ただいいますが、地域を巻き込んだ取組をするにあたって、先生個人の力量に頼るのではなくSSH研究部を中心に組織的に役割分担をして進めてきました。また、共通理解する時間を授業時間内に設けてきたことで、先生同士が「コミュニティ」となり、管理職や核となる先生が異動したとしても持続可能になるような組織づくりが徐々にできあがってきたのだと思います。

教室とは、生徒が学び合い 互いの良さを認め合う場所

生徒にとってどんな授業が良い授業かは、教科や教員それぞれが考える

ことです。私は国語科教員時代、決して学力が高くない生徒たちに主体的に自ら学ぶ力を付けたくて、文章を読んだら400字程度で自分の意見を書き、それをグループで共有することを毎時間徹底してやっていました。国語を苦手とする生徒たちが食いつくように教材選びにもこだわって。大事なものは、一人ひとりの読み取り方や表現を否定しないこと。個々の主張を最大限尊重すること。自分たちのことを評価してもらえたいということが伝わると、生徒は授業を受けたくなるのです。

生徒が授業中に寝るのは面白くないからで、それは教員も辛いものです。生徒たちの成長を考え、生徒たちが夢中になって引き込まれて、脳をフル回転させるような問いづくりが大切なのです。「授業が面白かった」と言われるのも嬉しいですが、「あー、今日は頭使ったな、クタクタや」というのも嬉しいものです。夢中になって考えたことを仲間と共有し、学び合い、互いの良さを認め合うことで、クラスや学校という集団づくりにもつながっていきます。

す。そのために教室があるのです。

生徒は1日の多くの時間を学校で授業を受けて過ごしています。生徒一人ひとりの未来を拓いていくのも、クラスづくりも、学校づくりも授業からすべてが始まります。授業がつまらないと生徒の学びへの意欲も失われていく。それが広がると信頼関係が崩れ学級崩壊や、学校崩壊につながります。だから授業が一番大事なのです。本気で授業を大切にして、未来の日本を築いていく生徒たちと一緒に育っていきましょう。

若狭高校 (福井・県立)

1894年創立。全日制4学科(普通科・国際探究科・理数探究科・海洋科学科)、定時制普通科を擁する総合高校。2019年に開催されたG20サミット教育関連イベント「21世紀の教育政策～Society5.0時代における人材育成～」で生徒が探究学習について発表を行い探究への取組が注目されるほか、アメリカ、台湾、シンガポール、フィリピンの高校生とマイクロプラスチックについて共同研究を行うなど多様な生徒が多様に活躍する教育場面を設けている。現在は、2期目のSSH、OECDイノベーションスクールネットワーク2.0(OECD-ISON2.0)、教科等の本質的な学びを踏まえた主体的・対話的で深い学びの視点からの学習・指導方法の改善の推進研究(AL研究)の、3つのカリキュラム研究開発プロジェクトを同時進行中。



時間があれば授業を見学している中森校長。取材当日も公開授業だけでなく、いくつかの教室を覗いて生徒と先生の様子を知ろうとしていた。